

寒地における 苺栽培の注意点

北海道農業試験場

花岡 保



寒地の苺栽培の要点につき、とくに北海道の札幌地方を中心に書いてみたい。

寒地では東北地方などの冷涼地とともに、苺は永年栽培という本州の暖地とは異なった栽培様式で以前から栽培が行なわれてきた。これは欧米の北部でもみられる作型であり、本道の農家の経営面積が比較的大いこと、水田裏作に組入れられないこと、寒地向苺の品種特性の特異性、など多くの要因が関係していると考えられる。

病虫害に未知の分野が多かっただけに、輪作に対する考慮すら薄らぎ、古くからの永年栽培を行ってきた有名な生産地は収量品質ともに低下し、廃耕あるいは減反の産地も相当にみられ、現在の主要な産地も近い将来は同じ傾向をたどる様相が散見される。他方地方中心城市の発展や交通事情の好転とともに、新産地が消費の増加とともに要求され、新産地も都心から相当遠距離の地帯に伸びつつあるようである。

さて苺はビタミン類も多量に含まれ、果実の女王といわれるほどに消費層が増大し、青果物の中では市場の取扱金額では、ミカン、リンゴ、夏ミカン、バナナなどに次いで需要が多く、栗、桃、ブドウ、西瓜などを上まわる傾向にあります。札幌中央卸売市場でもここ数年間の価格はあまり値下りがなく、消費者が増大してより多量の生産ならびに出荷を期待する声が高い。農家にとっても比較的、資材、労力ともに収穫、調製を除いては手がかからず、早くから現金収入が得られるなど、有利な作物といえます。

1 品種について

従来二〇〇以上の苺の品種や系統を手がけてきたが、外国からの導入直後や、交配実生の育成初めには草勢が強く、良質、多収のものも多けれど、早いものは二、三年遅いものは六、七年くらいで同一の品種と思われぬほどの退化（弱勢化）を示す例が観察できます。これはウイルス病、線虫類（ネマトード類）、根腐病などによる単独または重複被害の結果と見なされること、が最近明らかになりつつあり、品種の選定に、以上のような病、害虫に被害のない苗木を用いることがまず前提の条件となることを念頭に入れておく必要があると思う。

以上の点から品種を考えると、普通の露地用の品種として、大果、美味、外観の美しさ、適度の硬さもち日持よく輸送にたえる、退化が遅い、多収で収穫後半でも粒が大きいなどの諸点を総合して、オランダから導入した「ジャスパー」、「ホレラ」の二品種が卓越しており、国内交配種として「盛岡一六号」、「盛岡一七号」、アメリカで育成された「ポカホントス」、「フロンテナク」などがよく、またウイルス病を除いた「幸玉」もよく、またマルチとトンネル被覆、灌水を行なう場合の「ダナー」などの利用も大いに著目する必要があるかと思われ。なお「盛岡系統」はまだ系統の段階なので一日も早く優良品種として決定されることが切望される。「東北八〜十五号」は九号が多収であるが、何れも一長一短があり、前記二系統の方が優良のように観察されます。なお「ジャスパー」、「ホレラ」に

ついでには現在線虫の寄生のない株を養成中であるが、何分にも手数を要するので、苗数が増えるまでにはなお年数を要すると思われる。

2 育苗

従来、苺の育苗は寒地では畦間を広くにとり、畦間に発生したランナー苗を植え込む簡易育苗が主であったが、線虫の密度を少なくしてその被害をおさえるためには、隔離育苗圃を今迄に苺を栽培したことの無い圃場とか線虫の少ない水田跡地などに選定して、健苗を増殖する必要がある。

つぎに親株の選定は毎年収穫用圃場が輪作できる形式に計画して（一）、三年更新を主体とする）、できるだけ無病株を導入し、あるいは草勢、葉形、葉色のよい強勢の多収株を選定し、前年秋の時期に予めクロールピクリンかDDなどの土壤消毒剤を三〇〜四〇センチ注し、上はポリエチレンフィルムで約三〜四週間くん蒸する。くん蒸消毒された土は耕耘機で充分転転しガス抜きし、幅一〜二〇センチ前後の幅に短ざく形の育苗圃を作り、養成したランナー株を二五センチの方形植に植えていく。なお消毒剤であるが根腐病（レッドステール病、根腐れ線虫ではない）の発生する圃場はクロールピクリンが有効であるが、線虫害のみの甚しい圃場はDDの方が薬のしげき臭が少なく、またより安価なのでこの方がよい。床場の施肥は三、三平方尺当り堆肥一〇〇ギ、硫酸一〇〇ギ、過石二〇〇ギ、カリ五〇ギを成畦前に全面に二〇〜三〇センチの深さによく混合して施用する。

